

氏名(本籍)	おお しか たく ろう 逢坂卓郎(東京都)				
学位の種類	博士(芸術学)				
学位記番号	博乙第2634号				
学位授与年月日	平成25年2月28日				
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当				
審査研究科	人間総合科学研究科				
学位論文題目	光を基盤とするコスモロジーと宇宙芸術				
主査	筑波大学教授	博士(芸術学)	齊藤泰嘉		
副査	筑波大学教授	農学博士	鈴木雅和		
副査	筑波大学准教授	博士(芸術学)	仏山輝美		
副査	筑波大学教授	博士(感性科学)	山中敏正		

## 論文の内容の要旨

### (目的)

20世紀後半から始まった人類の宇宙進出に伴い、宇宙を主題とした新しい芸術表現が生まれるようになり、それらは宇宙芸術と呼ばれている。しかしながら、宇宙芸術の歴史的背景の解明や現状の分類整理、あるいは今後の宇宙芸術の可能性に関する学術的考察は、必ずしも十分とは言えない。本研究は、宇宙芸術をめぐるそのような状況を踏まえ、人類の宇宙進出から生まれた新たなコスモロジーに基づく芸術が、どのような主題と表現形態を生んだのか、さらに宇宙芸術の本質とは何かについて、宇宙に関する芸術表現の歴史を振り返り、国際宇宙ステーションなど実際の宇宙空間における実験から得たデータをもとに解明することを目的とする。

### (対象と方法)

論文は、序章、第1章 アース・ワークと宇宙概念 古代遺跡と光のコスモロジー、第2章 宇宙芸術の胎動、第3章 日本の宇宙芸術実験 ISS-JEM に於ける人文社会科学利用、結章 光を基盤とした宇宙芸術から構成されている。第1章では、宇宙芸術の原点として、1950年代から始まったアース・ワークを取り上げ、その背景にある古代遺跡との関連性について検証している。アース・ワークの対象作家は、イサム・ノグチ、ロバート・モリス、ローランド・バラディー、ジェームズ・タレルである。この章では特に光のコスモロジーという観点から宇宙芸術について分析している。第2章では、無重力という観点から宇宙芸術を取り上げ、“Zero G Art (無重力芸術)”の第一世代としてパウ・ハウスのモホリ・ナジ、フランス、ヌーヴォー・レアリスムのイヴ・クラインらによる重力からの解放をテーマとする作品を取り上げている。さらに1990年代以降、“Zero G Art”の第二世代として、フランスのダンサー、キッツ・デュボア、中国の作家ニュー・ボウらによる弾道飛行実験における宇宙芸術実験、即ち身体性を伴うパフォーマンスを取り上げ、これらを現在の宇宙芸術の先駆者として位置付けている。第3章では、日本の国際宇宙ステーション JEM-“KIBO”に於ける人文社会科学利用プロジェクトを取り上げ、JAXA と日本の芸術家たちによる取り組みの意義について分析している。さらに、論文著者の発案により2008年から行なわれた国際宇宙ステーションでの光と水による宇宙芸術実験の結果について考察し、光は無重力を視覚化するメディアであることや、水は界面という

物理的な特性による新たな造形の可能性を有することを確認したとしている。結章では、宇宙飛行士へのインタビューを中心に考察し、古代遺跡から現在に至るまで宇宙芸術は光が中心にあるとしている。

#### (結果)

宇宙芸術を歴史的に振り返った結果、古代遺跡が現代のランドアートの成立に深い関わりを持つことが明らかになり、光を基盤とするコスモロジーが、古代遺跡からランドアートまでを貫く表現原理となっていることを明らかにした。また、宇宙芸術を無重力環境という観点からとらえた場合、無重力環境が芸術の革新的創造に寄与している点を示した。国際宇宙ステーションにおける実験結果や宇宙飛行士へのインタビューを通じて、宇宙芸術の本質は、生命を育む光の表現にあることを明確化した。

#### (考察)

宇宙芸術は、古代遺跡からランドアートに至るまで、その思想的基盤となるコスモロジーや実際の作品において、光こそが中心にある。光は地球の生命を生み、育み、人類を宇宙に導いたと言える。このことから、宇宙芸術は、ライトアートの究極の姿であると結論づけた。

### 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、宇宙芸術の歴史と現状、さらに今後の可能性を明確に示している。特に古代遺跡からランドアートを経て現在の宇宙芸術に至るまで、光こそが、宇宙の芸術的表現の中心に存在するものであり、宇宙芸術がライトアートの究極の姿であるとした考察は、21世紀の新しい芸術創造の理念と方向の一つを明確化したものとして意義深い。論文著者自らが弾道飛行実験を体験した上での貴重な研究成果であり、世界における宇宙芸術の発展に寄与するものと確信する。宇宙芸術に関して、歴史、実験、理論の3領域を統合し、一貫して光を基盤とした観点から分析するという研究方法に独自性と発展性が認められる。また、芸術学の新領域を切り開いた点において高い学術的意義を有している。

平成25年1月16日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、学力の確認を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。